

# 女性高齢者の着装における行動意識と被服衛生学的効果

——巢鴨とげぬき地蔵境内にみるエージングファッション——

熊谷伸子\*<sup>1</sup> 芳住邦雄\*<sup>1</sup> 児玉好信\*<sup>2</sup> 荻村昭典\*<sup>3</sup>

Studies on Behavior Consciousness and Hygienic Consideration of Old Woman

—— Generation in Clothing Fashion at Togenuki-Jizo, Sugamo in Tokyo ——

Shinko Kumagai Kunio Yoshizumi Yoshinobu Kodama Akinori Ogimura

## Abstract

Clothing status of old woman generation was investigated at Togenuki-jizo, Sugamo in Tokyo which is one of the most popular places for many old women to go together in the late summer of 1994. The wears of the total of 610 women were observed to be apparently classified. Seventy-one of them were interviewed to clarify their purchasing and behavior consciousness in clothing fashion. The following results were obtained :

1. The countermeasures to cover physical defects which were caused by aging were generally observed at their clothing. A belt was used for a one-piece dress to prohibit empirically the convection thermal transfer. "Mon-sla" was widely used to keep their daily activity and thermal insulation, which is modified slacks for old woman.
2. Their clothing forms were classified into four types. A : a one-piece with a belt, B : a one-piece without a belt, C : a suit, and D : a two-piece dress. The first, the second and the third types account for about 10% of their wears. The fourth type about 70%. Moreover, it was found that they represented their behavior characteristics.
3. Potentially, most of the old women also have the intention to dress themselves fashionably. In addition, they select their wears from the standpoint of health and safety. It is thought that the original fashion should be developed for old women generation.

(キーワード 女性高齢者 : old women 購買行動 : Purchasing behavior 行動意識 : behavior consciousness 衛生学的効果 : hygienic consideration)

## 1. はじめに

国際家族年あるいは国連国際人口・開発会議などの開催にみられるように、近年、女性の健康や生活が議論の中心に据えられ、21世紀へ向け国境を越えて社会や人間、家族の在り方が

問い直されつつあるのが世界的潮流である。

一方、我が国に目を向けると、平成6年9月時点の推計<sup>1)</sup>でも、総人口の14.1%が65歳以上の人々で占められるなどこれまで類を見ない程の急速かつ高水準の高齢化社会を迎えつつある。さらには、少子化現象も加わり家族の存在そのものに大きな影響を与える「人口転換」が訪れつつある<sup>2)</sup>のが現状といえる。

このような状況の下で、高齢化社会に対応するための厚生福祉施設、医療など多方面に関する検討が進められ、少なからぬ成果が実施に移

\*<sup>1</sup> 共立女子大学大学院家政学研究科

\*<sup>2</sup> 共立女子短期大学生活科学科

\*<sup>3</sup> 文化女子大学家政学部

されつつある<sup>3)</sup>。しかし、一方では、高齢者の心理的充足という視点も極めて重要であるといえるが、必ずしも充分な対応がなされてはいない。

本研究では、高齢者個々の心理とその発露に密接な関わりを有する着装に着眼し、その現状を行動意識および健康、安全などの被服衛生学的意義の観点から解明することを主眼においている。

これまでも、青年からみた高齢者像に関する研究<sup>4)</sup>や衣服の志向に係わるもの<sup>5) 6) 7)</sup>などの報告はなされているが、その数は少ない。また、ライフスタイルや被服行動に関する検討は、女子学生<sup>8)</sup>や中年世代<sup>9)</sup>に限られている憾みがある。

本研究は、女性高齢者の着装観察および意識調査を通して、そのライフスタイルの特徴を考察し、今後の超高齢化社会を迎えるにあたり、高齢者の快適な生活を確保するための対策の手掛かりを得ることを目的としている。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象

本研究では、女性高齢者を調査対象とし、その調査地域は東京都豊島区にある巣鴨とげぬき地蔵の境内とした。ここは、「おばあちゃんの原宿」と称され、参拝のために集う高齢者で賑

わっていることと、高齢者向けの衣料店が多いことから選定した。

着装の外観調査の対象者は、延べ610名である。また、意識調査の為のアンケート対象者は、62歳から89歳までの71名であり、その平均年齢は74.2歳である。

### 2.2 調査方法

女性高齢者の服装を目視により観察した。被験者に共通して存在する特徴を見出だすと共に、その類型化・分類を行なった。さらにそうした分類ごとの人数比を求めた。

一方、行動様式と着装に関する意識を口頭質問法により、アンケート調査した。質問内容は、(1)被服購買行動の頻度、(2)被服選択時の考慮要因、(3)他人の服装への関心の有無および児玉ら<sup>10)</sup>により整理された表1に示した行動意識に関する項目である。表1に対する回答は、1 思わない、2 やや思う、3 とても思うの3段階とした。これらにそれぞれ0, 1 および2 得点を与え、項目別に単純集計を行ない、平均値を求めた。

### 2.3 調査期間

平成6年8月下旬および9月上旬

## 3. 研究結果および考察

### 3.1 巣鴨とげぬき地蔵境内でみた女性高齢者の着装の一般的特徴

#### (1) 上下衣

女性高齢者の身体的特徴は、見かけ上は加齢に伴う背中丸みおよび腹部の肥満に典型的に集約される。これを反映してか上衣は襟線りの広いものが多く着用され、また、その裾は下衣の上に出しウエストを隠す傾向が認められた。これは、年齢と共に変化してきた体の線をカバーし、高齢者であっても現状をより美しく見せたいという心の現れのためではないかと推察された。

スカート丈には、個々における大きな差は認められずほぼ100%の人が膝下10~15cmであった。本研究の観察時は晩夏の時期ではあったが、

表1 高齢者の行動意識に関する調査項目

#### 依存性

- 1) 周囲に合わせて行動したい
- 2) 何事につけ人の意見に従うようにしたい

#### 離脱性

- 1) 気のあった仲間とだけ付き合いたい
- 2) 人間関係の煩わしさを避けたい

#### 悠々自適性

- 1) 淡々とした気持ちで暮らしたい
- 2) 気ままな暮らしを楽しみたい

#### 活動性

- 1) いろいろなことをやってみたい
- 2) 変化のある暮らしをしたい

この長さは、季節による変動を受けにくいものと思われた。膝が冷えないようにしながら活動性を確保する長さであるからである。なお、スカートの形態としては、そのほとんどがフレアであり、タイトであったとしても体に密着するものではなく、スリットが入っており足まわりのゆとりが確保されているものであった。

ズボンについては、若い世代のような上下セットのパンツスーツという形態は見られず、別々に用意されたものを組み合わせて用いていた。ズボンそのものにも顕著な特徴があり、裾がすばまっている形をしている。「もんぺ」と「スラックス」の組み合わせという意味で「モンストラ」とこのズボンは呼ばれている<sup>7)</sup>。この参拝者の着用しているズボンは、判を押したように皆この形であった。前述のスカート丈同様に、ズボンにも裾がすばまっていることにより、動作が容易で下腿が冷えないようにと健康、機能の面が重視されているものと思われる。すなわち、高齢者自身の着装選択により被服衛生学的な配慮がなされていると言える。

## (2) 履物・髪形・持ち物

履物はほぼ100%の人が靴であり、なおかつ、ほとんどの人が「ウォーキングシューズ」または「健康シューズ」と呼ばれるものをいわば定番として用いている。これは靴底がまんべんなく地面につき、かつ、かかとのある安定型をしている。さらには、とげぬき地蔵付近の商店街で販売されているものは、デパートなどでのものに比較し、安価であり、また重量が軽いという特徴のため特に普及度が高い傾向にある。

髪形は、個々の高齢者ごとに際だった変化は見受けられず、90%以上がショートのパーマであった。手入れ方法が楽なためかもしれない。

持ち物は、手に持つタイプのものが多かった。加齢により背中が丸まってきたためか、ショルダーバックはほとんど見受けられなかった。

## 3.2 外見的特徴による着装の類型化

女性高齢者はどのような意識の下に被服を着用しているのだろうか。ここでは、外見の形態から現状をとらえた。当初、とげぬき地蔵

に参拝に来る高齢者も多様に思えたが観察を続けることによって、4つのタイプに類型化し、それぞれの共通点を見出だすことができた。併せて、全体に対する人数比をも把握した。図1に結果をとりまとめた。

### (1) ベルト付きワンピース型(タイプ1) : 人数比9.8%

ワンピースにベルトを締めていることが、この分類に属する高齢者の服装の一番のポイントである。現在の若年世代では、ベルトを飾りとして用いるため、ベルトだけを別買い、使い回している。しかし、女性高齢者では、腰を冷やさないためという目的で実用的欲求からベルトを着用している。ベルト付きワンピースを購入、着用する理由がここにある。

人体は発熱体であり、それによって暖められた被服内の空気は対流効果によって体側に沿って上昇移動し、人体を冷却する作用をする<sup>10)</sup>。ベルト着用によりこうした対流熱放散を防ぐ工夫がなされており、体験的ではあるが、被服衛生学の理にかなった着装方法であり大変興味深い。身体の保温に留意しながら、ワンピースを着用し個性を表現していることになる。

このタイプの人々は、数人のグループでやや遠方から来ている傾向がある。この距離感がこうしたベルトの着用を促しているのかもしれない。

なお、素材は晩夏の時期を反映してか、化繊などの軽そうなものが多く見受けられ、また、襟線りは広く、5分袖ないし半袖が多かった。ベルト生地は、若年世代と異なり共布のものが一般的であった。

### (2) ベルトなしワンピース型(タイプ2) : 人数比9.2%

ベルトのないワンピースを着用していることが重要なポイントである。ゆったりとしたラフな感じを受ける。前述の保温効果が期待できるベルトをしていないからといって、腰の冷えるのを心配しなくてよいほどに健康なのかというとそうでもないようである。くるぶし丈の靴下を履いていることから分かるように冷えの対

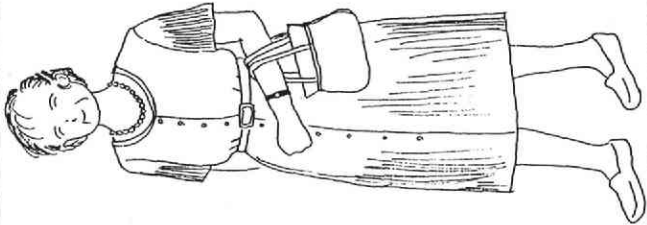
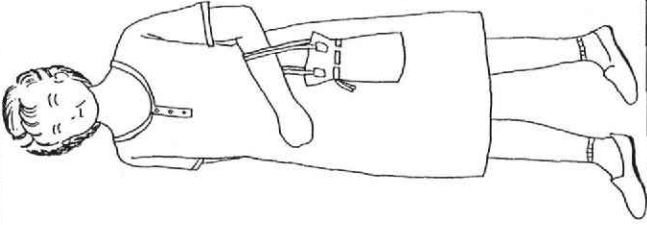
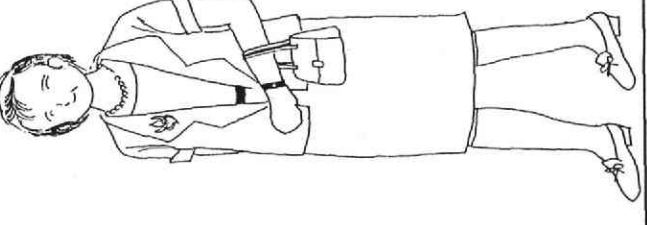
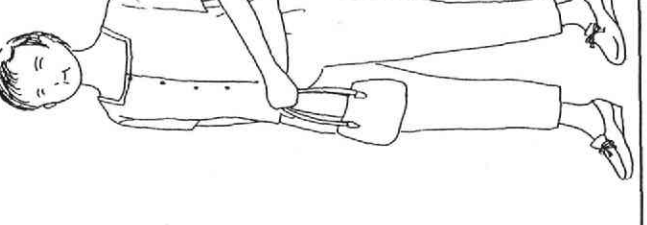
	ベルト付きワンピース型	ベルトなしワンピース型	上下セットスーツ型	上下組み合わせ型
モデル				
髪型	ショートのパーマ (黒髪も白髪もいる)	同左	同左	同左
上衣	素材は化繊など(軽そう) 襟ぐりは広い	素材は綿が多い 襟ぐりは広い	素材はサマウールなど 襟ぐりは広い	素材は化繊、ニットなど 襟ぐりは広い
下衣	五分袖、半袖が多い 共布のベルトが多い	ゆったりしている 半袖が多い	ウエストをだしている 裾下10~15cm	ウエストをだしている 裾下5cm、タイトスカートを 穿く人が多い
靴	ウオーキングシューズ (ケンコーシューズ)	同左	同左	同左
靴下	ストッキング(膝丈)	ストッキング(膝丈) くるぶし丈靴下	ストッキング(膝下)	ストッキング(膝下) くるぶし丈靴下
持ち物	手に持つバッグ ポシェット(ショルダーは少ない)	同左	同左	同左
アクセサリー	たまにネックレス	アクセサリーは無し (近所に住んでいる人が多い)	たまにネックレス	同左

図1 果鴨「とげぬき地蔵」における女性高齢者の着装分類

処にも気配りがされている。このスタイルの高齢者の居住地は近隣であることに特徴がある。つまり、近所だからこういう格好でも良からうという人が多く、短時間の外出の着装ということのようである。

また、居住地に近いのか一人で行動している人が数多く見受けられたことも、このタイプの特徴といえる。一方では、袖の長さがここに類型化した4つのタイプのなかで最も短いことも注目に値する。この時期の暑さへの気軽な対応がとられていると見受けられる。素材は綿が多く、襟線りは広くゆったりとしている。アクセサリーは、ほとんどしていない。

(3) 上下セットスーツ型 (タイプ3): 人数比 8.5 %

上下セットのものを着用し、ここで類型化した4つのタイプなかで最も改まった装いをしていることがポイントである。こうした着装をしている人は、朝夕の時間に、かつ、グループではなく単独で見かけられることが特徴である。こうした様子からなんらかの仕事を持っている可能性が高いと推測された。とげぬき地蔵参拝者の共通項の1つであるウォーキングシューズ以外の靴がみられたのはこのタイプのみである。これらを総合的に考えるとややフォーマルな活動への関与がこうした着装の駆動力となっているのかもしれない。

素材はサマーウールなどやや高級感のあるものが用いられており、肩パットが入っている。また、テーラードカラーのデザインが多く、ウェスト出した着装に特徴がある。ネックレスをしている人が見受けられもした。

(4) 組み合わせ服型 (タイプ4): 人数比 72.5 %

上下それぞれ別のものを組み合わせて着用していることがこのタイプの着装のポイントとして挙げられる。単独ではなく、数人のグループで来ている人がほとんどで、全体に対する人数比率は最も高かった。とげぬき地蔵参拝者の主流派を形成しているパターンといえる。

このタイプに属する人々の下衣は、スカート

の着用者もいてその特徴は、膝下10~15cmぐらいのタイトスカートの着装である。しかし、ズボンを着用していた人が多いのがこのタイプの特徴であり、さらに言えば、前述の「モンスラ」の愛用者のグループである。ブラウス、シャツの素材には、化繊、ニットなどが用いられ、襟線りは広い。また、頭からかぶるタイプの多いことも特徴の1つである。

とげぬき地蔵近くの商店街で売られている衣料品は、こうしたタイプの上下別々のものが多く、また、比較的安価に求められることもあって、再三の参拝がてらのショッピングによる帰結としてこうした着装の同一化が生じているのかもしれない。

### 3.3 被服の選択と行動に関する意識

女性高齢者は、服装をどう捉えているのか、また、着装に伴う個人の内面的なライフスタイルの意識は、外見の類型化とどのように関わっているかをアンケート調査により検討した。

#### (1) 被服の購買行動

服装品を購入する頻度を尋ねたところ、5割以上の人が月に1回以上と回答した。質素儉約の時代を生きてきた世代であるから昔から持っているものを着用しているのではとの予断に反して、結構買い物好きであるといえる。

図2は、被服選択時に何を考慮するかを尋ねたことへの回答である。いわば、嗜好の傾向を尋ねた結果である。外見よりも、機能や健康を重視した購買行動をしていることが読み取れる。若い世代のファッションの選択とは異なり、少し故障の出てきた体を考慮しながら目的にあった無理のない服装を選択し着用しているようである。さらに、「他人の服装が気になりますか」の問に対する回答では、半数強の人がならないとしていた。しかし、一方では、同一化の傾向が認められているわけで無意識のうちにも周囲の参拝者の服装に興味を持っていることは否定出来ない。

図4には、被服購入時に重視する項目を具体的に尋ねた結果である。いわば、購買行動の傾向を問うた結果である。値段、色、デザインの

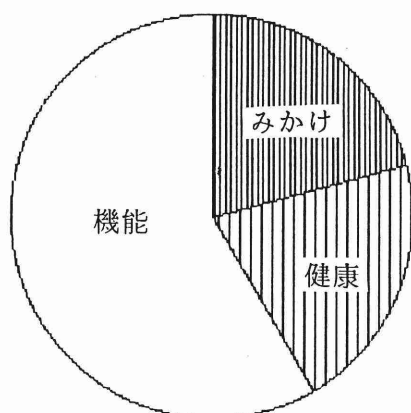


図2 被服選択時の考慮要因

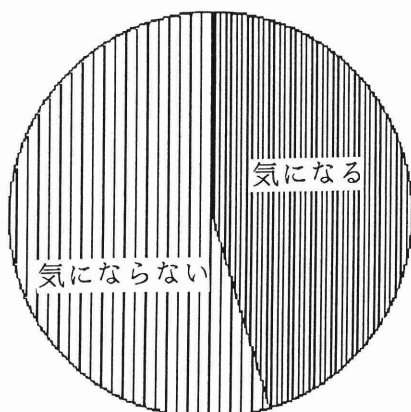


図3 ひとの服装への関心の有無

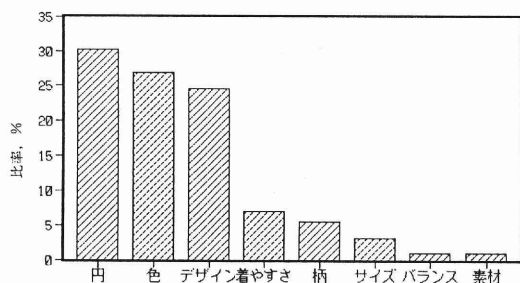


図4 被服購入時の判断規準

3つに回答が集中していることがわかる。経済的な側面を重視してはいるが、ファッション性への志向が、とげぬき地蔵に集う女性高齢者にとっても根強いことを示唆する結果といえる。アンケートの聞き取り調査の過程において、この周辺の商店街の衣料品は、安価ではあるが何度来ても同じものが多いという不満の声が聞かれた。図4の結果と相まって考えると、価格的にも抑えた上で、高齢者向けの機能、健康に留意した斬新な衣料が、今求められているといえそうである。

## (2) 高齢者の行動意識と着装タイプ

被服を選択し着装する行動とライフスタイルの意識の間の関連を把握出来ないかと発想し、表1の設問への回答を、図1に分類したタイプごとにとりまとめた結果が図5である。ここでは、高齢者の行動意識を児玉ら<sup>9)</sup>の分類に従い4つの項目により構成されるとした。すなわち、1) 依存性(周囲に合わせて行動する)、2) 離脱性(人間関係の煩わしさを回避)、3) 悠々自適性(気ままな暮らしを楽しむ)、4) 活動性(変化のある暮らしをするために何かにチャレンジ)についてを得点分布で表すことにした。

図1に示したベルト付きワンピースのタイプ1は、悠々自適の要素と離脱の要素が高く、依存性の要素が低い。ベルトなしワンピースのタイプ2は、活動性の要素が極端に低い、その他は平均的である。上下セットスーツのタイプ3は、依存性の要素が低いことが特徴的である。ここに集う女性高齢者の主流を占める上下組み合わせ服のタイプ4では、離脱性の要素がやや低く、依存性の要素が高く、また悠々自適の要素も比較的高いことが認められた。

以上の結果は、着装の分類と行動意識の間には大きな関連を有していることを示していると考えられる。すなわち、ベルト付きワンピースのタイプ1は、遠くから参拝に来ている人が多いということからもアンケートの結果の通り、悠々自適な生活を送っていると言えるだろう。ベルトなしワンピースのタイプ2は、近所の人が多いというだけあって、活動の要素が低かっ

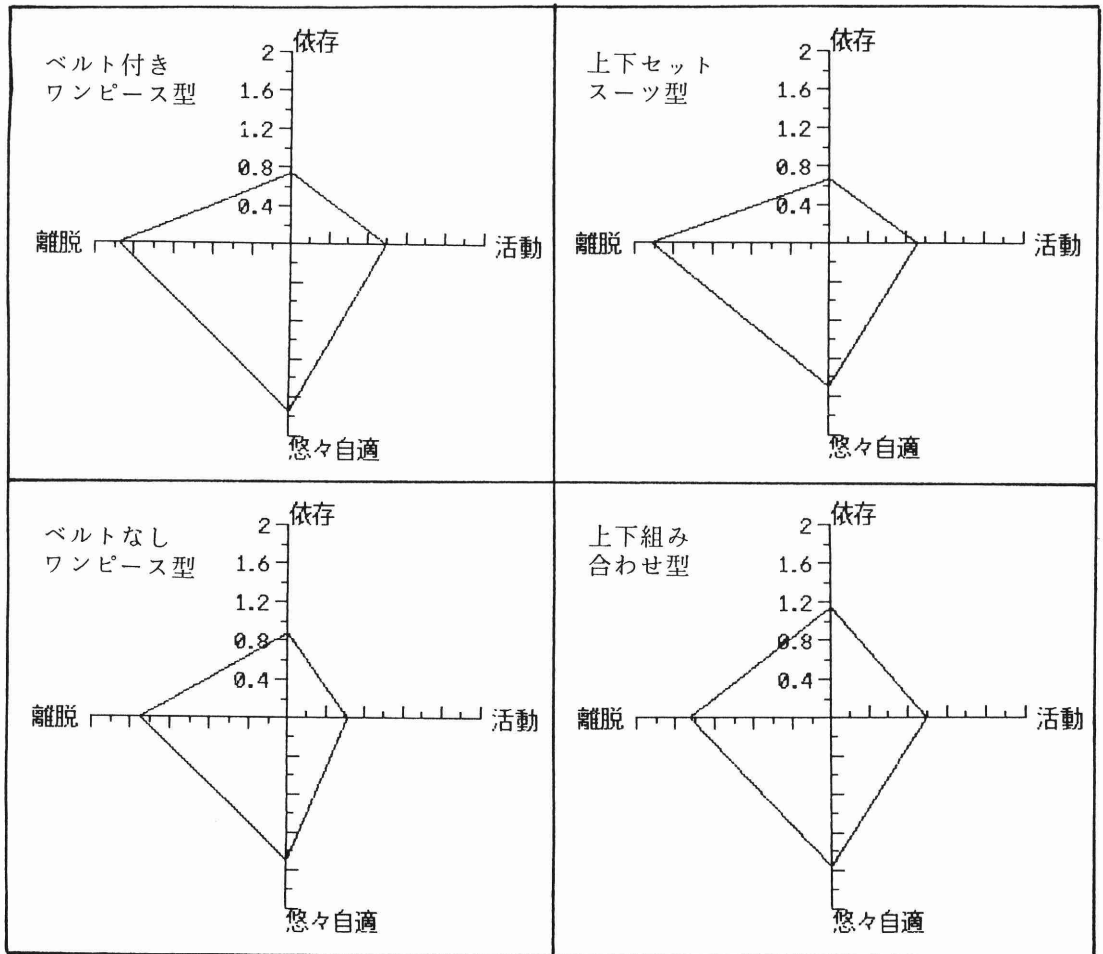


図5 日常生活における行動要因

た。上下セットスーツのタイプ3は、依存性の要素が低いことから、高齢者には珍しくなんらかの仕事を持っている可能性があるといえるだろう。最後に女性高齢者の主流をなす上下組み合わせ服のタイプ4は、数人のグループを形成して行動していることから明らかなように、離脱性の要素がやや低い依存型の傾向にあるものであろう。

このように着装によりその基本となる行動意識も異なることが分かったといえる。高齢者のファッションであっても、それぞれの個人が有するライフスタイル抜きでは語れないのである。被服の着装はサイレントランゲージであり、潜

在的な生活意識まで語ってしまうことを、本研究により改めて認識させられた。

#### 4. 総 括

女性高齢者が数多く集う巣鴨とげぬき地蔵境内において、1994年晩夏の時期にその着装について考察した。併せて被服の購買行動および行動意識について、口頭聞き取りよりアンケート調査した。その結果以下の事項が明らかになった。

(1) 加齢に伴う身体的欠点を補う工夫が、着装一般の特徴として認められた。上衣は襟線

りが広く、また肥満したウエストをカバーする傾向があった。スカート丈は冷え防止のため膝下10～15cmが一般的であり、ワンピースの場合にはベルトの使用により対流放熱を抑制する考慮が経験的になされていた。さらに、活動性と保温性を確保するため裾がすばまったスラックスである「モンストラ」の着用が普及していた。

(2) 外見から4つのタイプに類型化出来ることを見出だした。すなわち、1) ベルト付きワンピース型、2) ベルトなしワンピース型、3) 上下セットスーツ型、4) 上下組み合わせ服型である。人数比は、1)～3) がそれぞれ10%弱であり、4) が70%程度の主流を占めていた。

(3) 行動意識と前述の着装パターンには密接な関係があり、1) ベルト付きワンピースのタイプ1は、悠々自適の要素と離脱の要素が高く、依存性の要素が低い。2) ベルトなしワンピースのタイプ2は、活動性の要素が極端に低いが、その他は平均的である。3) 上下セットスーツのタイプ3は、依存性の要素が低いことが特徴的である。ここに集う女性高齢者の主流を占める4) 上下組み合わせ服のタイプ4では、離脱性の要素がやや低く、依存性の要素が多少大きく、また悠々自適の要素も比較的高いことが明らかになった。

全体的には高齢者にも根強いファッション志向があることが分かった。それに加えて、健康、安全を考慮に入れた被服の選択がなされており、こうした面を重視した高齢者向けのオリジナルファッションの開発の必要性が痛感された。また、買い物好きであることも本研究により判明している。

健康、機能、価格などに留意した新たな発想による高齢者向け衣料が供給されるならば、21

世紀に向けて高齢化世代のファッションは充実し、齢を重ねるごとに美しく魅力的になるファッション新時代を創りだせるのではないかと願い結びとする。

謝辞 本研究にあたり共立女子大学家政学部小暮桂子氏の協力を得た。深甚なる謝意を表する。

## 引用文献

- 1) 総務庁統計局, 統計局インフォメーションNo. 125, 平成6年9月14日, p.1
- 2) 落合恵美子, 21世紀家族へ, 有斐閣, 1994, p. 224～227
- 3) 平成5年版厚生白書, 未来をひらく子どもたちのために一育ての社会的支援を考える一, 1993
- 4) 竹田久美子, 細江容子, 袖井孝子, 鄭淑子, 徐炳淑, 日・台・韓・大学生の老人に対する態度と老後責任意識に関する研究(大学生の老人イメージ), 家政誌, 42, 1991, 405～413
- 5) 北村トモエ, 中村玲子, 高齢婦人の衣生活・服装色嗜好(第2報), 家政誌, 37, 1986, 113～119
- 6) 藤田信子, 高年婦人の衣服志向調査, 共立女子短期大学紀要(家政), 30, 1987, 1～12
- 7) 川添登, おばあちゃんの原因(果鴨とげぬき地蔵の考現学), 平凡社, 1989, 29～50
- 8) 高淑恵, 女子短大生におけるライフスタイルとファッション意識, 衣生活研究, 1985, 12, 40～47
- 9) 天野好野, 白井佐代子, 中川早苗, 中年勤労者のライフスタイルと被服行動の関連について, 繊維機械学会誌, 45, 1992, T218～T228
- 10) 児玉好信, 古谷野亘, 都市中高年に観る老後観の構造, 日本老年社会学会第36回大会報告要旨集, 1994
- 11) 田村照子, 基礎被服衛生学, 文化出版局, 1991, 55～60